有名建築その後

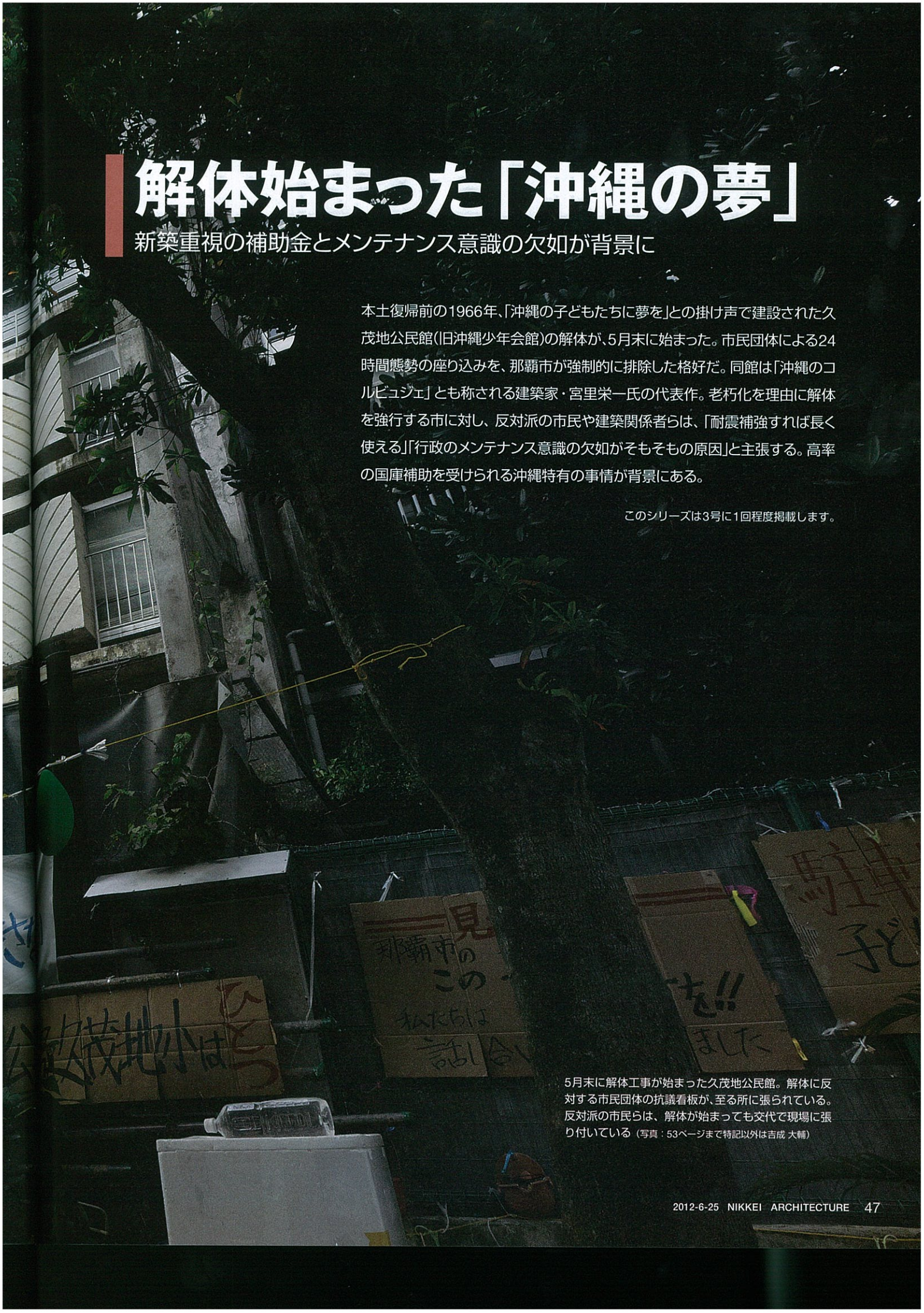
久茂地公民館（旧沖縄少年会館）（那覇市）

解体始まった「沖縄の夢」

新築重視の補助金とメンテナンス意識の欠如が背景に

本土復帰前の1966年、「沖縄の子どもたちに夢を」との掛け声で建設された久茂地公民館(旧沖縄少年会館)の解体が、5月末に始まった。市民団体による24時間態勢の座り込みを、那覇市が強制的に排除した格好だ。同館は「沖縄のコルビュジェ」とも称される建築家・宮里栄一氏の代表作。老朽化を理由に解体を強行する市に対し、反対派の市民や建築関係者らは、「耐震補強すれば長く使える」「行政のメンテナンス意識の欠如がそもそもの原因」と主張する。高率の国庫補助を受けられる沖縄特有の事情が背景にある。

このシリーズは3号に1回程度掲載します。



5月末に解体工事が始まった久茂地公民館。解体に反対する市民団体の抗議看板が、至る所に張られている。反対派の市民らは、解体が始まっても交代で現場に張り付いている（写真：53ページまで特記以外は吉成 大輔）

南側の外壁を見下ろす。入り口部分の庇の解体が進む。開口部に立つ斜め模様のコンクリート壁は、沖縄の強い日差しを遮る目的で設けられたもの。5月31日に撮影

大きく張り出した庇や丸みを帯びた柱、6階の曲面を描くバルコニーが久茂地公民館の特徴。コンクリートが劣化していることが目視でも分かる

上に見える球体はプラネタリウム。2011年4月に最後の上映会が開かれた

5月28日、那覇市中心部にある久茂地公民館（旧沖縄少年会館）の周りは、一時騒然とした。解体反対派の市民が24時間態勢で座り込みを続けるなか、那覇市役所の職員30人以上が公民館の周辺を包囲（写真1）。敷地内に置かれた反対派の荷物を撤去して公民館の入り口を強制的に板などで閉鎖した。

反対派の市民らは4月上旬から50日間以上にわたって公民館の敷地内に座り込みを続けていた。4月4日には解体工事差し止めの仮処分を那覇地方裁判所に申し立てた。その判断が出ていない段階での着手は、反対派にとって「到底納得がいかない」ものだった。

子どものための寄付で建設

戦後建築の解体で、これほど激しい反対運動が起こることは珍しい。なぜ、反対派の市民らは、24時間態勢での座り込みまでしてこの建物を守ろうとするのか。

反対運動に関わる建築設計事務所team DREAM（那覇市）の福村俊治氏は、「もちろん建築的な評価の高さもあるが、この建物の場合はデザインうんぬん以前に、つくられた経緯に極めてまれな価値がある」と説明する。

旧沖縄少年会館の竣工は1966年。当時、沖縄子どもを守る会の会長だった屋良朝苗氏（本土復帰後の初代沖縄県知事）が中心となって全国から寄付を募り、「沖縄の子どもたちに夢を」との掛け声でつくった建物だった（図1）。

当時の建設趣意書は、犯罪や非行が絶えない沖縄の青少年問題に触れ、本土では多く建設されている教育・福祉施設が沖縄には皆無であると訴えた。賛同して集まった寄付金は、目標の4倍近い48万

写真1　那覇市職員が囲んで強制的に解体

解体反対派の市民らは、左写真のように敷地内で座り込みを続けていた。5月28日、那覇市職員が市民らの荷物などを撤去し、公民館を囲んだ（下の写真）。板で進入防止のための柵をつくり、解体工事に着手した

（写真：福村 俊治）

ドル（当時のレートで約1億7000万円）にもなった。竣工から13年後の79年に沖縄子どもを守る会が那覇市に無償で譲渡した。

解体に反対している市民の多くが、60年代～70年代にこの建物を利用した人たちだ。「新沖縄子どもを守る会」のメンバーである砂川敏彦氏のその1人。「現在の沖縄の子どもたちも、まだまだ恵まれた環境にあるとは言えない。建設時の思いを受け継ぐためにも、解体すべきではない」

一方で、那覇市は一貫して解体の立場を崩さない（図2）。その根拠は、2011年2月～3月に実施した耐力度調査。耐力度点数（1万点満点）は、文部科学省が「構造上危険な状態」とする4500点より1000点以上低い3026点だった。「極めて危険な状態で早急な対策を要する」との指摘を受けた。

この調査結果に対し福村氏は、

図2　耐力度調査の結果を最重視

取材を基に本誌が作成

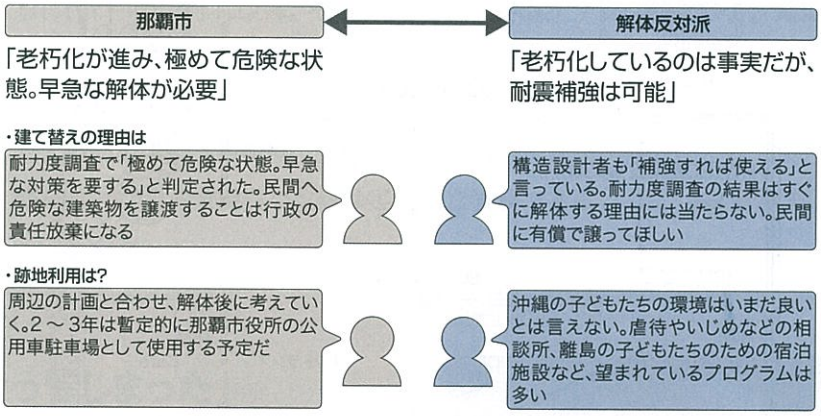
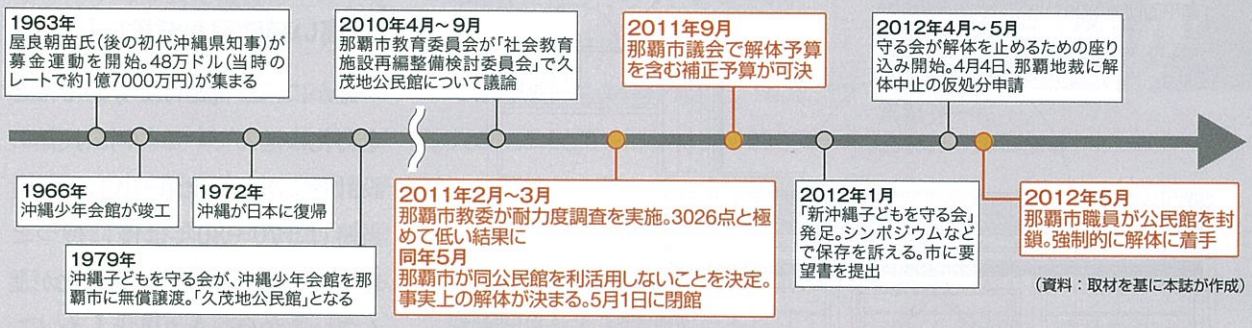


図1　沖縄最高層のRC造建築、全国からの寄付で実現



（資料：取材を基に本誌が作成）

[久茂地公民館の歴史]

久茂地公民館の前身である沖縄少年会館は1966年に完成した。所在地は那覇市久茂地。RC（鉄筋コンクリート）造6階建ては当時沖縄で最も高い建築物だった。当時の沖縄は教育施設などの整備が遅れ、青少年の非行や犯罪などが問題となっていた。本土復帰後に初代沖縄県知事を務めた屋良朝苗氏が「子どもに夢を」と呼び掛け、沖縄だけでなく本土からも寄付を募って建設した。設計は、沖縄出身で横浜国立大学、東京大学大学院で建築を学び、沖縄で多くの建築を設計した宮里栄一氏が担当した。プラネタリウムや鉄道模型展示などのほか、離島の子どものための宿泊機能も備えていた。79年に運営団体が那覇市へ無償で譲渡。久茂地公民館と名前を変え、施設も改修された。左の写真は竣工時、右は現在の姿。周辺の開発が進み、隣にはモノレールが走る（左写真：沖縄県公文書館）

「調査で低い点数が出たのは事実だが、補強すればまだまだ使える」と主張する。福村氏は構造設計者である金箱温春氏の協力を得ながら、実際に耐震補強の図面も作成した（図3）。見積もった補強費用は約2億円だ。

新沖縄子どもを守る会の砂川氏は「2億円であれば、寄付で不可能な数字ではない。青少年支援団体は、虐待などの相談所として使える場所を欲している」として、有償での譲渡を那覇市に求める。

しかし、那覇市教育委員会生涯学習部生涯学習課の具志真孝課長はそうした意見に反論する。「危険な建物を民間に売却・譲渡するということは、行政としての責任放棄に当たる。耐震改修については、一部の専門家の意見だけを聞くわけにはいかない。耐力度調査の結果を重視すべきだ」

那覇市は公民館の跡地を、市役所の公用車駐車場として暫定的に使用する計画だ。

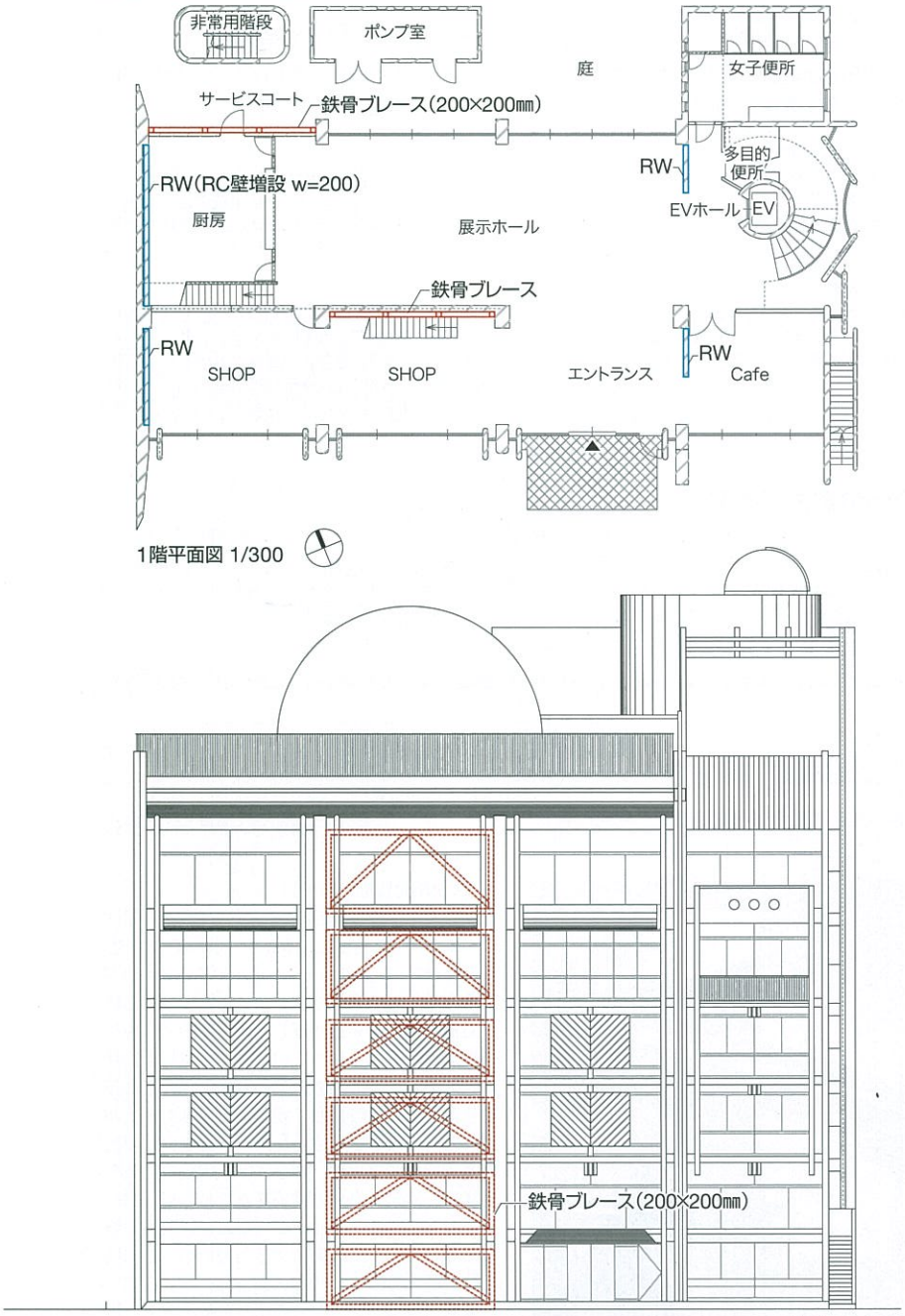
「高い補助率が背景に」

確かに、目視だけで分かるほど老朽化は進んでいる。同公民館の設計者である宮里栄一氏は「設計当時は、70～80年は優に持つと思っていた。これだけ老朽化が進んでいるのは、きちんとしたメンテナンスをしていないことが原因だ」と話す（右ページの囲みを参照）。福村氏も同様の意見で、「その背景には、本土と比べて高率の補助金制度がある」と指摘する。

沖縄県には、第二次世界大戦中に大規模な被害があったことや、米軍施設が集中するといった事情により、公共建築を建設する際に沖縄振興特別措置法などを根拠として補助率をかさ上げする特別措

図3　ブレースと壁増設で補強可能

（資料：team DREAM）



team DREAMの福村俊治氏らが作成した久茂地公民館の耐震補強案。鉄骨ブレースなどで外観への影響を最小限にとどめる。補強費用は約2億円と見積もっている

置が採られてきた。例えば義務教育施設整備の補助率は、原則として本土が0.5なのに対し沖縄県は0.85。かさ上げは、新築や増築などに対して適用され、老朽化施設の改修費用には適用されない。

「高率の補助金があるから、『古くなったら壊してつくり直せばいい』という考え方が根付いてしまっている。行政はメンテナンス意識が欠如している。今後、補助率が下がったらどうするのか。価値の高い建築物を活用することで、都市の空洞化を防いだり、さらなる観光客を呼び込んだりする思想に転換すべき時だ」（福村氏）

久茂地公民館は、所有者が那覇市に代わった79年に改修。その後、2003年～11年に、那覇市が約1000万円を掛けてコンクリート剥落に対する防護ネットの設置や壁の補修を行ったが、大規模な改修は実施していない。

1990年代以降、琉球政府立法院議事堂（1954年竣工）や沖縄県立博物館（66年竣工）といった本土復帰前に建てられた沖縄の建築が、老朽化などを理由に姿を消している。メンテナンスによって、地域の歴史や文化を伝える「生き証人」を保存活用していくことは、沖縄の行政や建築関係者にとって大きな責務である。（島津 翔）

設計者に聞く

「見るに耐えない建築になってしまった」

宮里 栄一氏
旧沖縄少年会館設計者

2011年4月に、久茂地公民館のプラネタリウムで最後の上映会があり、案内役として参加した。正直、見るに耐えない建築になってしまっていた。トイレの排水管は詰まったままで、内部の壁面もひどく汚れていた。5月の閉館の直前だったとはいえ、あんなに汚くなっているとは思いも寄らなかった。

老朽化の一因は、メンテナンスの不備だろう。設計当時、70～80年は優に持つだろうと考えていた。ただし、それはきちんと手を入れながら使った場合の話だ。私は、久茂地公民館の解体は、沖縄建築への警鐘だと思っている。補助金によって多くの建物を建てては壊してきた。今では、本土復帰前の建物がほとんど残っていない。これからもこんな考え方で良いのか。

写真2　内部にらせん階段を設置

内部の特徴は子どもたちが遊びながら上階に行けるようにと設けたらせん階段
（写真：砂川 敏彦）

東京文化会館に影響を受けた

屋良朝苗さん（後の初代沖縄県知事）に設計を依頼されたとき、特別な仕事になるとすぐに分かった。沖縄の子どもたちに夢を与えたいという明確な目的があり、多くが寄付によってつくられた。この経緯に建築的な価値を感じた。

東急文化会館（設計：坂倉準三）の五島プラネタリウムや東京文化会館（設計：前川國男）などを参考にしながら、設計を詰めていった。特に、東京文化会館からは、大きな影響を受けた。

屋良さんからは「夢を与えるような建築にしてほしい」とだけ言われていた。沖縄特有の日差しに耐える庇を伸ばし、窓にも日よけを設けた。子どもたちが遊びながら上階に行けるように、らせん階段を設置した（写真2）。壊されても、屋良さんたちの思いは受け継いでほしいと思う。（談）